

関西大学図書館所蔵の野里梅園『標有梅』

並河 暢子

1. はじめに

『標有梅』は、大坂の南組惣年寄を勤めた野里梅園（1785～未詳）が、各地に伝わる古器物や古書画、古文書などを模写・影写等して収集した資料を収載した資料帳で、自筆稿本やその転写本の存在が知られている。本学図書館にも、写本が一本所蔵されているが、『標有梅』の写本のなかでは、比較的注目されてこなかった。今回、その特徴と本学図書館所蔵本のみに掲載される序文について紹介したい。

2. 特徴

本学図書館所蔵『標有梅』は、巻1から巻5の五冊からなる。各巻の巻首には「梅園」印が押され、巻5の途中から巻末まで白紙が続くこと等から、自筆稿本と考えられる。

巻1から巻4に掲載される対象は、装束や絵巻に見える紋様等であり、各種「紋様」を中心に集められている。



図1 『標有梅』巻1 巻首
「梅園」印と紋様

一方巻5は、冒頭に東大寺法華堂の手水屋の絵か



図2 『標有梅』巻5 土馬

ら始まり、現在の考古遺物にあたる対象の模写等を中心に収める。

図2の土馬は神宮文庫蔵『標有梅』（上）に同じ図があり、そこに「将門城跡ヨリ出ル古代土馬」「兼葭堂蔵」等と記され、大坂の木村兼葭堂の所蔵であったことが知られる。

この『標有梅』収載の土馬については、本学客員教授徳田誠志先生により、本学博物館に所蔵されている馬形埴輪であることが突き止められている（徳田 2019）。



写真 馬形埴輪（関西大学博物館蔵）

こうした巻1から巻4と巻5の掲載対象の違いは、写し方や紙の違いにも表れている。巻1から巻4は薄い雁皮紙を用いて紋様を写しとり、その紙を本紙として綴じ、袋の中には透けないように本紙よりは厚い紙を一枚挟んでいる。巻5は別紙に写したものを本紙に収まる様に切り取る等して、貼り込むことが主となり、本紙には巻1から巻4に比べて厚い紙を用いている。

3. 序文

本学図書館所蔵の『標有梅』には、他の自筆本には見られない序文が記載されている(図3)。

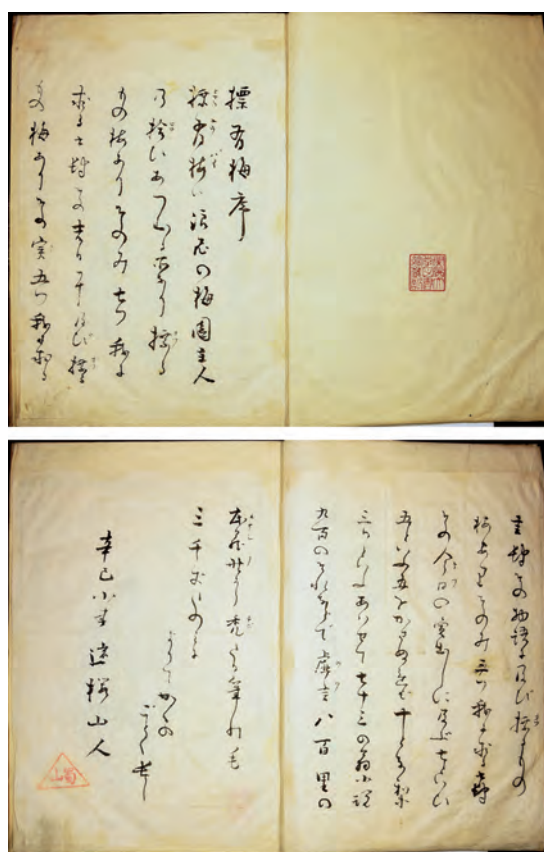


図3 『標有梅』巻1 序文

序文の作者は、「遠桜山人」すなわち大田南畝(1749～1823)で、「辛巳小春」から文政4年(1821)10月に記されたものであることが分かる。

『標有梅』という書名は、中国の古典『詩経』にある詩「標有梅」を典拠としており、序文では、その原詩に基づきながら、大田南畝が巧みにアレンジした文章で、浪花の梅園主人(野里梅園)が拾い集めた資料がついに売りに出されるに及んだことを宣言

している。

序文は、巻1の一丁表から二丁表にかけて、本紙より少し小さめの三枚の紙に書かれ、それを本紙に貼り込んでいる。貼り込まれた紙には、折り目が見えることから、江戸にいる大田南畝から大坂の野里梅園のもとに書簡のように送られたと推測する。

4. 野里梅園と大田南畝

『標有梅』を作成・編集した野里梅園は、名を嵩年、通称を四郎左衛門といい、煎茶を嗜み、古物の鑑定に長じ、狂歌や書画もよくした人物として評され、大坂町奉行のもとで、市政を担う惣年寄(南組)を勤めた。

主な著書には、『標有梅』を原資料として、古器物や古書画等の模写類を収めた好古図譜『梅園奇賞』があり、文政11年(1828)刊行、翌12年に大坂の書肆河内屋源七郎により売り弘められている。

野里梅園については、平亭銀鷄の『難波金城在番中 銀鷄雜記』に「古物家」として紹介され、惣年寄の一人であること、書画・人形・雑器等の古物を夥しく所蔵していること、その古物の目録である小冊子のあることを記す。また狂歌が上手く、画を好んだこともある。

同書には、その父を「狂歌師」としてあげ、大坂の惣年寄を勤めた人物で、江戸生まれ、故あって大坂へ来て居住すること20年とし、南畝の社中という。

『難波金城在番中 銀鷄雜記』を記した平亭銀鷄は上州甘楽郡七日市の前田家の藩医で、天保5年(1834)8月4日から翌6年8月4日まで主君の加番としての大坂赴任に同行した。同書には、大坂で付き合いのあった人物として野里父子が記されている。

これらのことから、野里梅園の父は狂歌師としての顔を持ち、江戸から大坂に移住した人物で、大田南畝の社中と目される人物であったことがわかる。梅園自身も狂歌を詠み、古物も収集したコレクターでもあったようだ。大坂においては、野里父子とも惣年寄の勤めとともに、狂歌師や古物収集家としての顔が知られていたことがわかる。

また上記の平亭銀鷄以外にも、主君の大坂赴任により来坂した学者や武士たちの日記に野里梅園は

「多く古器古書を蔵す」(『慊堂日曆』文政12年8月13日条)、「古物好の風流家也」(『大坂日記』天保3年3月3日条)として認識される人物であった。

一方、序文を記した大田南畝は、ことばをあやつる才能に恵まれ、10代で狂詩・狂文作者として江戸文壇に登場し、20代で狂歌ブームの中心人物として世に知られた人物で、昨年(2023年)は没後200となる年であった。

南畝は、雅号であり、通称直次郎、字は子耜、名は覃、狂歌師としての名は、四方赤良といった。50代での大坂銅座勤務を経て、銅の異名である「蜀山居士」にちなんで蜀山人の雅号も用いた。『標有梅』序文にある署名の「遠桜山人」は、61歳の時、小金井での花見の際に号したものである。

大田家は代々、幕府の徒歩衆を勤め、七十俵五人扶持の御目見以下の御家人で、下級の幕臣であった。生家の家格は高くはなく、豊かなものではなかったが、多賀谷常安について漢文を学び始め、15歳のとき国学の師として内山賀邸に入門し、18歳の時には儒学の師として松崎観海に入門し学問を続けた。内山賀邸の門下では、和文を自在に綴る基盤を養い、師の賀邸が狂歌をも詠む人であったため、その門下には、師をまじえた門人たちが、愉快的戯文や狂詩、狂歌を作って楽しむおおらかな気風があったようだ(沓掛 2007)。

天明の狂歌ブームを経て、大田南畝は寛政6年(1794)、松平定信の人材登用政策の一つである学問吟味を優秀な成績で合格した後、寛政8年に支配勘定に抜擢される。そして能吏としての道を歩みながらも、その後も文事に関わり続け、広い交遊関係を築いていった。

寛政13年(1801)1月11日には、大坂銅座出張を命じられ、同年3月から享和2年(1802)3月まで、大坂に滞在した。南畝は、この在坂生活のなかで銅座勤務をこなしながらも、公務のいとまに大坂行楽に出かけ、交遊関係も広がった。そのなかで、本草学者で文人、古今の珍本や器物の大コレクターであった木村兼葭堂とも出会い、その死去(享和2年1月)の直前まで双方行き来を重ねている。

以上より、野里梅園は父の代に江戸から移住し、父は狂歌師としてしられた風流家で南畝の社中であった。梅園自身も狂歌を詠み、古物のコレクターであった。野里父子は、大坂の惣年寄という公務を担いながらも、狂歌や古物に造詣が深いことから、大田南畝とも江戸以来の交流が続いていたのだろう。

野里梅園と大田南畝との関係は、本学図書館の『標有梅』序文以外には、同年(文政4年)に近松門左衛門墓碑銘を、大田南畝の撰文によって、野里梅園が建立していることが知られる。

5. おわりに

本学図書館所蔵『標有梅』の紹介とともに、そこに収載される大田南畝自筆序文について見てきた。序文は文政4年(1821)10月に記されているので、南畝73歳、梅園38歳のときのものである。南畝は、文政6年に亡くなるので、最晩年といえる時期である。

『標有梅』の作者である野里梅園は、大坂の惣年寄を勤めながらも古物に多大な興味を持ち、それらのコレクターでもあったが、各所に伝わる文物については模写や影写等をして資料の収集に努めた。その成果として文政11年(1828)には『梅園奇賞』を出版し、翌年売り弘められている。

本学図書館所蔵の『標有梅』には、『梅園奇賞』の出版に先立つ時期、文政4年の大田南畝による序文が付けられ、そこからは、現在自筆稿本が伝わる『標有梅』の出版が計画されていたことが読みとれた。この南畝序文は、他の自筆稿本には見えず、本学図書館本のみに掲載され貴重である。またそこに収載された古物の一つが本学博物館に所蔵されている事実は、歴史の不思議を感じさせ、興味深い。

引用文献

- 沓掛良彦『大田南畝—詩は詩佛書は米庵に狂歌おれ—』
京都、ミネルヴァ書房、2007年
徳田誠志「関西大学博物館所蔵 村兼葭堂旧蔵の馬形埴輪
について」『阡陵』No.79、2019年9月、2～7ページ

参考文献

- 小玉道明「野里梅園『標有梅』の世界」『ふびと』65、2014

年1月 68～82ページ
多治比郁夫“野里梅園のこと”『随筆百花苑』第10巻付録
第15号（森銑三ほか編）東京、中央公論社、1984年、
1～5ページ
中村幸彦ほか編『浪花の噂話』東京、汲古書院、2003年
野口武彦『蜀山残雨 大田南畝と江戸文明』東京、新潮社、
2003年
浜田義一郎『人物叢書 大田南畝』東京、吉川弘文館、1963
年

同編『大田南畝全集』第18巻、東京、岩波書店、1988年
宮崎修多“大田南畝における雅と俗”『日本の近世 第12
巻 文学と美術の成熟』（中野三敏編）東京、中央公論
社、1993年、189～230ページ
山崎勝昭“野里梅園をめぐる人々”『俗地と文人—幕末期
大坂の萩原広道—』大阪、ユニウス、2018年、89～
106頁
山路孝司“生駒山人「野里屋」養子時代と養子解消の真相”
『会報くさか』第3号、2019年

（なびか ようこ 非常勤講師）